

時

僕の名前は刹那（セツナ）。両親が今を大切に生きろとの願いをこめ付けたようだ。

僕は今、大学2年生。東京の私立大学の理学部数学科に在籍している。名前の影響からか時空への疑問は小学生の頃から僕の脳裏に張り付いたままだ。

時空への疑問解決に迫ってみようと数学科を選んだ。物理学科でも良かったが高校時代の数学教諭S先生に影響された。S先生は授業中 π の求め方を質問した僕に授業中の多くの時間をさいて丁寧に答えてくれた。それは正多角形近似や級数展開等いくつかの方法を紹介するものであった。以来、数学に傾倒した。

関東平野がちょうど広がり始める群馬の田舎に生まれ育った僕は東京に出る際、遠い親戚が新宿駅近くに居たので親を通して頼み込み下宿させてもらった。3畳一間、門限は10時と何かと窮屈だが立地条件が良かった。新宿駅まで徒歩10分、朝の満員電車に乗ると代々木、千駄ヶ谷、信濃町、四ッ谷、市ヶ谷と過ぎ飯田橋へ、飯田橋駅特有の湾曲したホームに電車が止まると掃き出される学生たち。その波に包まれながら神楽坂に向う。信号を渡り花屋の角を左に折れるとその大学があった。

入学して「数考会」というサークルに入った。数学を自由に語り合う緩いサークルだった。輪講形式で数学の専門書を読み、週末は決まって大学近くの安い居酒屋で飲んだ。

数学科同級生のなかで数少ない女子である遙（ハルカ）もこのサークルに属していた。ハルカは秋田の造り酒屋の娘で知的な会話を好む才媛だ。きれいな瞳をもち肌が抜けるように白かった。僕にとってハルカに会えることが大学生活の楽しみの一つでもあった。日本酒好きのハルカはサークルの週末の飲み会には必ず参加した。さすがに全国各地の酒をよく知っており、その解説は楽しかった。

そして彼女の白い肌がほんのり赤くなるころいつもの数学談義が始まった。

「ねえ、ところでセツナ君、時空へのアプローチは進んでいるの？」

質問を受けるまでもなく大学入学以来、ネットはもちろんあちこちの書店、図書館でも調べている。紀伊國屋、丸善など大型書店の宇宙や時空関係の棚だけでも田舎の受験参考書の棚より大きかった。時間のあるときは新宿御苑北にある新宿区立四ッ谷図書館に行った。蔵書は多くなかったものの借りた本を御苑のベンチに腰掛け読んだ。甲州街道の喧噪も届かない静かな緑の合間を抜ける風が心地良かった。

ハルカの質問にはそんな風に何冊も読んだ時空に関する本から答えなければならなかったが実は読めば読むほど難解で迷路にはまった状態だった。

「ハルカはニュートンが時間が過去から現在、未来へと均質に流れていると言ったことは知っているね。でも実際の時間の進みは平地より山の上の方が遅いし、また速く動く物体での時間も遅く進むことが実験でも証明されているんだ。」

「滅び行く地球から脱出するため人類の最適地を探るインターステラという映画をハルカも見ただね。そこでは高速で旅をした主人公が自分よりはるかに年老いた娘と出会うのは知ってのとおりだ」

「そうね、あの映画はノーベル賞をとった物理学者が監修していたはずよね。」

「さすが、ハルカ。でも、時空の探求はいまだ暗中模索で人知も及ばずという状況なんだ」

そのとき聞いていた誰かが

「そのための僕たちは数学を学習しているのだ！」と盃を上げて言った。

皆の酔いが回り、会計を済ませて外にでると人通りは少なかった。「また明日」とそれぞれ解散しようとしたときそれは起こった。青信号を渡るハルカに「じゃ」と僕が手を上げるとハルカも手をあげた、そのときだったハルカの横から信号無視の車が突っ込んできた。「危ない」と僕が声を上げた瞬間、ハルカの体は何かを押されたかのように向かいの歩道に転がった。ハルカの体すれすれに車が通り過ぎた後には不思議なウンカの大群のような黒いモヤが消えていった。「ハルカ！」と抱きおこした僕の腕の中で「大丈夫」とハルカは笑顔を見せた。ほっとした僕はなぜか時刻を確認した。22時32分ジャスト。そのとき、この時刻が重要になろうとは知るよしもなかった。

この事件をきっかけに、ハルカと僕は恋人同士になった。探究心の強い二人の相乗効果なのか競うように勉強した。二人はゼミこそ違うものの大学院に進学、共に修士号を取得したとき学生結婚した。その後、ハルカは大手IT企業に就職し、僕が博士号を取得するまでサポートしてくれた。高校時代は成績も目立たなかったセツナだったがその博士論文は学会でも高く評価され多くの大学や企業からオファーが来た。僕は迷わず念願の時空研究所に就職し時空移動、つまりタイムマシンの研究に没頭した。民間の研究所だが資金も潤沢で世界の頭脳を集めていた。しかし、時空問題挑戦へのトップランナーであるこの研究所にしても時空を解明するのは容易ではなかった。

時間を遅らせることは可能であり自分より進んだ時間の世界を見ることはできるが過去に戻ることは難しかった。

時空の壁をどう抜けるかを試行錯誤するうちにいつの間にかセツナは60才を迎え副所長になっていた。

そのころやっと、細胞をつかさどる最小の物質、素粒子に記憶作用があるという発見で物体を過去に送ることへの光明が見えていた。素粒子には経年劣化がないという従来の定説は正確でなく個々に時の記憶が埋め込まれているという発見である。物体を素粒子に分解しある一定のエネルギーで振動加速させると時空の隙間を透過する。過去に送られた素粒子は、その記憶作用によって物体を再構成できるのではないかというのである。

セツナの目下の研究は、分解された素粒子個々が時空の隙間を透過するためどれだけのエネルギーをどうかけたら良いか。それにはスーパーコンピュータにおける膨大な計算と緻密な装置が必要であった。

物体では成功していた。例えば、金属に大きなエネルギーをかけ素粒子に分解し10年前へとさかのぼる時間を記憶素子に施し位置座標を決める。送転器の中で大きなエネルギーをかけ固有な振動を与えるとその金属は時空の隙間を透過し消えた。設定した座標に当時海水に覆われた場所を指定すると現在のその場所から10年分のさびが付いたその金属が見つかるのだった。

ただ生物に対する実験はまだであった。

そんな時、セツナの体に異変があらわれた。長年、大きなエネルギー照射の傍らにいたためか、痩せて疲れやすくなった。友人の医師に診断をお願いすると友人はすぐに造影検査、細胞診を行ってくれた。数日後、友人はしばらく無言のあとレベル4のすい臓がんでかなり進んでいると僕に伝えた。手術はできず、治療を施しても長くて余命5か月という。

宣告を受けてから僕は、都会の雑踏の中をさまよい歩いた。生物の過去への転送を目前にして自分は逝くのかと思うとくやしかった。ハルカにどう伝えるか迷った。

その時突然、自分の今の置かれた状況に40年前の記憶がよみがえった。あのとき信号無視の車からハルカを突き飛ばした黒い影は自分ではなかったかと思った。ハルカが今、存在するのはあの影のためではないか。自ら生物実験となってハルカを突き飛ばすだけの意思とエネルギーをもってあの時、あの場所に行った者。セツナしか考えられなかった。余命を知った今、セツナはそれが自分の宿命なのだとはっきり理解した。

体調は日々衰えていたが、ハルカに悟られないよう振舞った。

ハルカの居ない夜、セツナは、病気のこと、いままでの感謝、これから起こることへの冷静な対処をお願いする旨を記述しハルカに遺すと研究所に向かった。ハルカは理性的な女性だがショックは図り知れないだろう。でも僕が今やらなければハルカはこの世に存在しないのだ。

深夜、時空研究所の実験棟に入る。副所長である彼はすべての機器の運用権限があり、いまから行うことの詳細なメモと動画を残しながら最後は自ら行くべき過去への時間と座標を慎重に設定すると身を折りたたむように送転器に入った。

遠隔でスタートボタンを押した。

時空を透過したのは一瞬だった。1つ1つの素粒子に強い意思があるかのように、ハルカの背を押したあとそれはトラックに当たり霧散した。そしてセツナは戻ることがなかった。